

---

# 紫陽花色の思い出

春野天使

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

紫陽花色の思い出

### 【Nコード】

N6051A

### 【作者名】

春野天使

### 【あらすじ】

遠い昔、雨が大好きな男の子に出会った。その男の子から借りた傘を私は今でも大切に持っている。幼い息子も雨が大好き。紫陽花の咲く雨の季節の思い出を、私はふと思い出す…

五歳になる息子の淳平は、雨の日に散歩に行くのが大好きだ。土曜日の昼下がりに。淳平は黄色いレインコートを着て、はしゃぎながら玄関に走って行く。

「ママ、ママ、早く！ 雨が止んじゃうよ」

「お散歩の時は、雨が止んだほうがいいじゃない。そしたら、濡れなくていいでしょ」

私は淳平の後を追って玄関に走る。

「やだ。ぼくは雨が大好きだもん」

淳平は玄関に座り、小さな手を伸ばして黄色い長靴を履こうとする。

淳平は変わった子だ。お日様の照った晴れた日の散歩より、雨の日の散歩が好きなんて。

「どうして雨が好きなの？」

私は淳平に聞いてみる。

「雨がパラパラ降ってくる音が好き。水たまりの水をバシヤバシヤはねて歩くのも好き。でも、一番好きなのはねえ、傘を差して歩くこと！」

淳平の答えを聞いて、私はふと、遠い昔同じようなことを言っていた男の子のことを思い出した。

両方の長靴を履いた淳平は、ピョンと勢いを付けて立ち上がる。

そして、傘立てからアニメキャラのイラストつきの黄色い傘を取り出した。淳平のお気に入りの傘だ。

「ねえ、ママ。傘立てに置いてある小さい青い傘は誰の？」

大きな大人の傘の中に、一つだけ小さな子供用の傘がたたんだままの状態で立っている。それは、淳平の傘ではなかった。もう随分長い間、誰も使っていない、古い小さな子供用の傘。でも、私はずっと捨てられなくて、結婚した後家から持ってきてしまった。

「その傘はね、ママの思い出の傘なの」

私は傘立てから青い傘を取りだし、そっと広げてみる。広げた傘に、ひらがなで大きく名前が書いてある。『さいとうさとし』。幼い頃、雨の日に出会った見知らぬ男の子。名前が『さいとうさとし』という事以外、何も分からない。どんな漢字を書くのかも分からない。だけど、あの雨の日のことは、今でもよく覚えている。紫陽花色の私の思い出……。

あれは、まだ私が淳平と同じ幼稚園児の頃。梅雨に入り、雨が降ったり止んだりする日が続いていたある日。梅雨の雨が止み、空に薄く日が差したのを見て、私は直ぐにマンションを飛び出し、公園に遊びに行った。雨降りが続き、ずっと外で遊べなかった私は、厚い雲の合間からのぞく小さな青空が嬉しくて、はしゃぎながら走って行った。

雨が止んだばかりで、公園にはまだ誰もいない。ブランコも滑り台も雨粒で濡れ、砂場も湿っていた。

「つまらないなあ」

服を濡らしたり泥だらけにすると、母親に怒られる。私は仕方なく、公園の遊具を諦めて、紫陽花の花が咲き誇る花壇の方へ行ってみた。この前、紫陽花の花の中にカタツムリを見つけたばかりだ。

「カタツムリさん、いないかなあ？」

雨に洗われた紫陽花は、とても綺麗だ。花にも葉っぱにも小さな水滴がたくさんついて、キラキラ光っている。私は紫陽花の葉っぱを一枚一枚見ながら、カタツムリを探した。

「カタツムリを探しているの？」

夢中で紫陽花を見つめていた私の背後で、突然声がした。驚いて後を振り返ると、そこには小さな男の子が立っていた。片手に傘を持ち、片方の手のひらを上に向けて胸の所に広げている。

「あっ、カタツムリ！」

私は直ぐに男の子の元に駆け寄る。男の子の小さな手のひらの中に、カタツムリがのっかっていた。

「どこにいたの？」

「さつき紫陽花の中にいた」

男の子の手のひらをノソノソとはっているカタツムリの角を、私は人差し指でチョンとつついた。カタツムリの角がじわつと引っ込む。

「フフ、くすぐったい」

男の子は声を立てて笑った。カタツムリは、ゆっくりと男の子の手のひらから腕の方へと移動していく。

「あなたもこのマンションに住んでるの？」

「ううん、ママと一緒にママのお友達の家遊びに来たの。ママはまだお友達の家にいるよ」

「ふくん、あなたも幼稚園児？」

私は、この頭の良さそうな小さな男の子になんともなく興味がわいた。

「そっだよ」

「どこの幼稚園？」

「なつみ幼稚園」

聞いたことのない幼稚園の名前だった。

「ここからずっと遠いところにある幼稚園だよ」

首を傾げる私に、男の子は答えた。

「カタツムリ、紫陽花に返してあげようよ」

「うん」

男の子は片手でカタツムリを掴むと、紫陽花の葉っぱの上にちょこんとのせた。頭を殻の中に隠していたカタツムリは、またじわつと頭を出してゆっくりと移動し始める。

ポツン、ポツン。その時、空から雨粒が落ちてきた。雨粒は、紫陽花の花を揺らせ始める。

「あ、雨が降ってきた……」

慌ててマンションを飛び出して来た私は、傘を持って来るのを忘れていた。私の頭の上にも雨粒が落ちてきて、私は手で頭をおさえる。

すると、男の子が、小さな青い傘を私の頭の上にかざしてくれた。

「ありがとう」

私は笑って男の子を見つめる。男の子も楽しそうに笑っていた。

「ぼくね、雨の日って好きなんだ」

「どうして？ わたし、雨は嫌い」

「雨の日は傘がさせるだろ？ ぼく、傘に降ってくる雨の音を聞くのが好きなんだ」

「ふ〜ん」

雨はまた、段々強く降り始めてくる。小さくのぞいていた青空も見えなくなってしまうた。

「わたしは晴れの方が好き」

だけど、男の子と一緒に青い傘の中に入っているのが、わたしはなんだか嬉しかった。それが相合い傘というものなんだとは、その時は分からなかったけれど。二人で一つの傘に入っているのは、なんとなく安心出来る。その時だけは、雨が降り止まなければいいのに、と私は心の中で思った。

それからしばらくして、男の子の母親が男の子を迎えにきた。男の子は私に青い傘を差し出す。

「君に貸してあげる」

男の子はニッコリ笑ってそう言った。私はキョトンとしながらも、

男の子から傘を受け取った。

「じゃあね、バイバイ！」

「あっ」

男の子は降りしきる雨の中に走り出すと、母親の差す傘の中に飛び込んでいった。

男の子はもう一度私の方を振り返って、大きく手を振る。そして、母親とともにそのまま歩いて行った。私は男の子の青い傘を差し、

母親と男の子の後姿を、黙って見つめていた。やがて二人の姿は、雨の中に消えていった。

私の頭上に広げた青い傘には、『さいとうさとし』とひらがなで大きく書かれていた。差した傘を見上げ、私は声に出して読んでみる。

「さいとうさとし」

傘を打つ雨の音を聞きながら、私は青い傘の文字をずっと見つめていた。

「さいとうさとし」

淳平は私から小さな青い傘を受け取り、書かれている文字を読む。「ママ、さいとうさとしって誰？」

「ママが小さい頃に会った男の子、この傘の持ち主よ。その子から傘を借りたままなの」

「返さなくていいの？」

淳平は驚いたように目を丸くして、私を見上げる。

「いつか会える日が来たら返そうと思っただけだね」

私はクスツと笑う。さとし君ももう大人になっているはず。だけど、私の心の中のさとし君は、ずっと幼稚園児の小さな男の子。

「ぶ〜ん」

淳平はちよつと考え、いつもの淳平の傘を傘立てに戻す。

「じゃあ、今日はぼくがこの傘使うよ。傘差して歩いていたら、さとし君が気付いてくれるかもしれないから」

淳平は、さとし君の青い傘を肩にかけてクルクルと回す。

「そうね、気付いてくれるかもしれないわね」

「ママ、早く行こう！ 雨が止んじゃうよ」

私は淳平にせかさされて、外に出た。外は雨。道ばたに咲いている紫陽花達が、気持ち良さそうに雨に打たれている。大きな私の傘と小さな『さいとうさとし』君の傘。二つ並んだ傘からパラパラと楽

紫陽花色の思い出

しそつな雨の音が聞こえてきた。淳平もさとし君も雨が好き。私も  
少しだけ雨が好きになってきた。完

(後書き)

「テーマ小説」で投稿予定だった「雨」をテーマにした小説が二つ出来たので、その一つを投稿します。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6051a/>

---

紫陽花色の思い出

2009年6月21日23時40分発行